



ムカシの競馬を読む



すだ たかお 須田 鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第108回 10年・20年・30年前の5月

今から10年前、平成16年5月のG1レースは天皇賞春がイングランディール、オークスがダイワエルシエロ、NHKマイルCとダービーがキングカメハメハの優勝に終わった。ダービーは地方からコスモバルクの参戦が話題となっていたが、人馬ともに力を出し切れなかった印象で8着に終わっている。

そのコスモバルクを産んだホツカイドウ競馬のも関係のある話題で、10年前こんな形でユースになりつつ結局いまままでなかなかついていない、という話をひとつ御紹介しよう。平成16年5月12日付の朝日新聞夕刊から。

「ナイター競馬『トウインクルレーズ』の草分け、東京・大井競馬場で使われている青森県六ヶ所村産の『光る砂』が、底を尽きかけている。カクテル光線に映えるうえ、粒子が細かくてつぶれにくいとして18年前に採用されたが、その後全国の競馬場に広がり、残りは『数年分』

と関係者は危機感を募らせる。低価格の中国産砂へ切り替える競馬場も現れた」

しかし、実際には数年で枯渇することはなかった。いまでもJRA、道営、南関東、兵庫の各主催者は六ヶ所村の砂を使いつづけている。採掘技術の進歩などもあったのだろうが、本文中にもあるように「光る砂」と呼ばれる独特の砂を代替する商品も無いようだ。

砂を供給する業者のホームページによると、この砂は商品名としては「ルナサンド」と呼ばれている。最近では昨年と一昨年門別に1600トンずつ、一昨年には札幌と函館に400トンと1045トンといった具合に搬入されているので、まだ在庫はありそうだ。

ちなみにこの砂、ゴルフ場のバンカーにも使われているそうで、国内の相当数のゴルフ場で採用されている。

この砂を採用していない競馬場

わった。荒尾では入れ替わった馬が出走していたため、大きな騒ぎになった」

おおまかに説明すると、兵庫に所属するA馬が、平成4年7月の姫路戦を最後に放牧に出ていた。一方、荒尾に所属するB馬は、同じ月のレースを最後にやはり放牧に出ていた。

見た目が似ている2頭が同じ牧場にいたため取り違えられ、先に戦線復帰の態勢が整ったA馬が牧場を出るのだが、これがB馬と誤認されており、当然ながらBという名前が荒尾に入厩してしまった。荒尾では入厩時のチェックが甘く、別馬であることに気付かなかったという。能力はA▽Bなので、当然のことながらBという名で走る馬(中身は△)は前より強くなってしまう。B馬は金沢→道営→荒尾と転じて未勝利だったのだが、平成5年2月の「復帰後」は1, 2, 1, 1, 1, 2, 3, 2着。このタイミングでAという名前

前で走るようになった馬(中身はB)が兵庫に帰厩。こちらの検査で「馬が違う」ということになり、荒尾に問い合わせた事象が発覚した。やはり荒尾より園田のほうがちゃんとしている、ということなのだろう。

これだけでもえらいことだが、その後の処理がいたらない。市長を

は近隣で採掘されているものを使っているケースが多く、岩手競馬は宮城県産の、金沢競馬は神通川の砂を使っている。

続いて20年前、平成6年の5月から。世の中とうにバブルは弾けていたが、競馬界はなんとかなった程度景気が良かった。特に外国産馬の輸入が盛んで、こんなユースにもなっていた。平成6年5月10日のスポニチより。

「ジャンボ機から続々とサラブレッドが降りてくる。その数、なんと38頭(中略)アイルランドのシャノン空港から飛来したもので、外国産馬を購入した数か所の牧場が共同でチャーターしたもの。世界各地で購入され、アイルランドで育成されて3歳(筆者注：現表記2歳)のサラブレッド38頭が日本の地に降り立ち、検疫を受けるために昨年からは新たに開設された農水省動物検疫所小樽出張所胆振分室(厚真町)へ運び込まれた」

はじめとする荒尾競馬の主催者関係者が金を持ち寄り、園田の馬主に3000万円、荒尾の馬主に350万円を支払って馬を買取り、秘密裡に殺処分していたのである。そこまで含めて発覚したというのが引用した記事の中身だ。

そりゃ揉めるでしょ、という事件だ。荒尾競馬は発覚翌日の27日に開催を行ったが、バドックでは野次が飛び、市内は右翼の街宣車が走り回るといふ騒ぎだったそうである。当時の荒尾競馬はまだ、右翼が騒いでメリットがあるほどのビジネスだったのか……などという変な感想も抱いてしまうところだが、いざいざにしても今ではありえない事件だろう。

最後に、30年前の昭和59年5月から。シンポリドルフがダービーを勝って三冠に王手をかけた月だが、競馬界ではそれに先立ってアジア競馬会議という大イベントが行われていた。

それにもないアジア競馬騎手招待競走が行われたのだが、当該週のトレセンでは当時珍しい外国人騎手が調教に乗るといふことと、それにまつわるエピソードで持ち切りだった。

いま振り返っていちばん笑えるのは、こんなエピソード。昭和59年5月11日付のデイリースポーツか

欧州産馬だけで38頭とは、隔世の感がある。このときの2歳馬たちは、最終的に213頭がJRAに競走馬登録された。現在の3歳世代は101頭だから、倍以上ということになる。ちなみにJRAにおける出走数ベースで見ると、ピークは現19歳世代で、405頭が出走しのべ5976走した。当時と比べると内国産馬が強くなったこともあり、「マル外の驚異」は遠のいた印象だ。

千歳への航空機輸送という近代的なユースの一方で、地方競馬ではこんな前近代的な事件も起きていた。まずは5月27日付の日刊スポーツから引用しよう。

「競馬の競走馬が入れ替わって出走する事件があったことが26日、分かった。前代未聞の珍事の舞台になったのは、地方競馬の荒尾競馬場(熊本)と園田競馬場(兵庫)で、宮崎・都城にある牧場からそれぞれの競馬場へ移動する時に、2頭(アラブ・牡・現在7歳)が入れ替

ら。」「国際親善にひと役買ったのが稲葉厩舎のユニホームだった。たまたま南馬場で調教したバレーン国の国旗とデザインが全く一緒。そこで記念にとA・アクバル騎手にプレゼントしたところ、『お返しにラクダをどうぞ』と交換トレードが成立。150ドルするラクダ2頭をあとで送ってくるとのこと。到着後、どう使用するかは決まっていなかったが、馬オンリーの厩舎のマスクットになるかラクダの来日が楽しみ」

ホントかい、と今なら疑いたくなる記事だが、同日の報知、スポニチ、中スポ、日刊と他紙も揃って「お礼にラクダ」を伝えているので、トレセンでは相当に話題になったのだろう。なお、本当にラクダが来たかどうかは今回探した資料では判明しなかった。

ラクダで話題になったアクバル騎手は5月13日の東京10レースに組まれたARC国際騎手招待で1番人気のカリストアホーク号に騎乗したが残念なことに最下位。このときは招待レースが2鞍組まれ外国人騎手は1つずつの騎乗だったが、2レースとも連対は日本人騎手。アクバル騎手が乗ったのは違うレースのほうでタイのニヤマパ騎手が3着に入ったのが馬券に絡んだ唯一の結果だった。

ムカシの競馬を読む



平成16年・東京競馬場
東京優駿
優勝馬：キングカメハメハ

© JRA